◎実習報告・施設◎

令和元年度　施設実習

保育所実習担当　谷川　友美・大元　千種・木戸　貴弘・菅原　航平
・伊藤　昭博・中山　正剛・山本　裕一・米持　広美

令和元度の保育実習（施設）は、２年間実習に向けて指導を行い２年次８月に実施した。

１年次・２年次前期では、保育実習（施設）の事前指導として、実習の意義・目的・内容の理解、文章作成時の注意点、日誌の書き方、施設の理解などについて指導した。２年次後期は事後指導として、評価票面接やグループワークを通して振り返り行った。また、１・２年合同授業を実施し、２年生は１年生を指導する機会を持ち、１年生は２年生から学ぶといった「学び合い」の効果を期待した授業を実施した。この試みは、実習の意味を実感し、保育者となることへの自覚を促すことができたと考える。

＊

１．実習先　　大分県内　　63施設
　　初等教育科　　201名

２．実習期間　　１期　令和元年８月16日～８月27日
　　２期　令和元年８月30日～９月10日

３．施設実習の学習目標

１）実習施設の特色の理解
　施設の機能、どのような事由で子ども・障害者が入所してくるのか

２）施設の一般的な理解
　沿革、歴史、人物、物的環境等

３）施設に入っている子ども障害者の理解
　定員と現員、年齢別・性別、措置理由別、心身の発達状況　障害等

４）保育士の職務内容、役割の理解

５）養護技術（子ども・障害者とのかかわり方）についての理解と技術習得

６）実習生がそれぞれもっている研究テーマの達成

７）実習日誌を書くことを通じて記録の取り方の習得

４．保育実習（施設）を担当して

２年にわたる保育実習（施設）指導を通して見えてくる学生の変容から、実習体験の影響力と実習後の振り返りの意義を痛感している。学生の保育職へのモチベーションや保育の質をさらに高めるため、指導体制の改良に努めるとともに、実習先と養成校との協同体制の強化にも努めていきたい。

施設実習での問題から学んだ保育士の大変さと喜び

初等教育科２年　佐藤　七恵

私は、母子生活支援施設で施設実習をさせていただきました。これまで、保育所実習や幼稚園実習を経験してきましたが、施設実習ははじめてで、「どんなことをするのだろうか」「どんな関わり方をすればいいのだろうか」と実習が始まる一週間前は期待と不安で複雑な思いでした。

実習が始まり、私は施設の学童クラブで実習をさせていただくことになりました。「どんな子どもたちがいるのかな」とウキウキした気持ちで扉を開けて明るく挨拶をして入ると、子どもたちはみんな静かに夏休みの宿題をしていました。そのため、私のはじめての施設実習は、子どもたちの学習支援から始まりました。

施設実習が始まって、早くも私は二つの問題につまずいてしまいました。一つ目は学習支援の難しさです。母子生活支援施設に入所している子どもたちの年齢は６歳だったり12歳だったりとバラバラです。また、同じ年の子どもでも、理解力も集中力もそれぞれ異なっています。そのため「この教え方は難しいかな」「上手く伝わっているのかな」と教えるたびにいろいろと悩んでしまうことが多くありました。子どもたちの様子を見ながら試行錯誤の学習支援でした。改めて、他者に教えることの難しさを実感しました。

二つ目は、異年齢の子ども同士のいざこざです。前述の通り、子どもたちの年齢がバラバラなので、６歳と10歳の子どもたちが一緒に遊ぶなどの姿が多く見られました。私が、異年齢の子どもたちのいざこざで一番困ったことは、その中に子どもたちの上下関係が存在することでした。「お前より俺の方が年上だ」と年下の子を怯えさせてしまう子がいたり、「年下とか関係ない!!」と年上の子に強く反抗して、年上の子の怒りをさらに買ってしまう子がいたりし、いざこざはいつも口喧嘩ではとどまらない状況でした。いざこざの対応が上手くできていなかった私は、思い切って担当の職員に「いざこざなく、みんなで楽しく遊びたい」という気持ちを伝え、どうすれば良いのかを相談しました。するとその方は「どんな時でもいざこざは起きるし、いざこざが起こることは悪いことじゃない。でも、相手を傷つけることはいいことじゃないから、手が出た時は止めてあげてね」と優しい口調で答えてくれました。それまで私は、いざこざが起きるとすぐに子どもたちの中に入って解決しようとしていましたが、その職員に相談してからはすぐには中に入らず、そっと見守る姿勢をとるように意識しました。そのおかげで、少しずつ冷静に行動できるようになり、いざこざの対応もスムーズになっていったように感じます。

施設実習で生じたこの二つの問題のおかげで、改めて保育士として子どもを見守り育てていくことの大変さを学ぶことができたと思います。しかし、大変さだけでなく、実習期間中に子どもたちとブドウ狩りに行ったり、たこ焼きやフルーツオムレツを作ったりし、子どもたちと同じ時間を過ごす楽しさにも多く気付くことができたと実感しています。

母子生活支援施設は名前のとおり母子がともに生活しています。そして、多くの家庭が様々な背景や問題を抱えています。職員からお話を聞いたところ、「家庭でのストレスを我慢している子どもが多い」ということです。今回の実習を通して、私は、少しでも子どもたちが自然体で落ち着いてすごせるような配慮ができる保育士になりたいと思うようになりました。保育士としてたいせつな気づきや心構えにつながるとても良い経験をすることができた施設実習となりました。

一人一人の気持ちに寄り添う事

初等教育科２年　伊藤　実結

私はこの施設実習で一人一人の気持ちに寄り添うことが大切だと改めて感じました。

どのような場面でそのようなことが感じたのかというと、一人の子どもが人数の多い部屋や集まりなどに入れない時、無理に入らせようとするのではなく、その子どもに保育者が一人ついて少人数の部屋に移動したり廊下から集まりに参加できたりするように工夫していました。

また、偏食があり白ご飯しか食べられなく昼食の前に「食べたくないです」と言って泣き出してしまう子どもには、「午前中かけっこしたの？いっぱい動いたからエネルギーチャージしようよ。」「食べたくないかもしれないけど今はご飯を食べる時間だから席につこう」というような言葉がけで子どもを昼食に誘っていました。子どもが食べたくないという気持ちを理解した上で昼食に誘っていて良いなと感じました。またその子どもは飲み物を水しか飲むことができずお茶を飲めませんでした。保育者は子どもに「今美味しくなる魔法かけるからね」と話しかけ子どもに見えないところでお茶に美味しくなる魔法をかけた素ぶりし渡していました。子どもはお茶を飲むと美味しいと言い、たくさんおかわりをしていました。保育者は私に、「食べず嫌いのところもあると思うから少しずつでも食べられるように何かしらの工夫をしています。」と教えてくれました。子どもがどれくらい食べらることができるのかや、どのようにしたら子どもが食べたいという意欲が出るのかを考えていて素晴らしいなと感じました。

大きい音が苦手で大きい音が聞こえると保育者におんぶを求めたり、保育者にくっついてきたりする子どももいました。その子どもがおんぶを求めていたら保育者は「おんぶして欲しいの？」と言うように質問を投げかけ、頷くか返事をしてからするようにしていました。その子どもが安心できるようにおんぶをしていました。他の子どもがおんぶを求めてくる時は、甘えたいかららしく、時計に張っている果物の絵を見て「時間を決めよう。じゃあバナナのところまでいったらおしまいだよ。」というようにしていました。甘えておんぶを求めてくる子どもにはおんぶをしてくれる事が普通だと思われ無いようにしていました。

子どもがいけない事をしたら「Aくんそれはバツだよ。いけないよ。」と言葉かけをしていました。目を見て「ダメだよ」というだけではなく、手でバツを作る事で理解しやすくし、子どもがきちんと理解しているのか確認することが大事だと思いました。

今回の施設実習で、様々な個性の子どもがいる中でその子どもの気持ちを読み取り理解した上でその子にあった保育をすることが大事だと感じました。またその子どもが保育者の言葉を理解できているか確認をしっかりしたり、理解できていなかったら理解できるように絵のカードを見せたり分かりやすい言葉を使ったりして工夫をすることが大事だと分かりました。

このような事は施設だけでなく保育園や幼稚園でも同じだと思うので自分が保育士として就職しても役立つはずです。子どもに寄り添える保育者になりたいです。

私の施設実習

初等教育科２ 年　加藤　亜美

施設実習は初めてのことばかりでした。私は子ども発達支援センターの療育センターで実習を行いました。そこには重症心身障がいの子どもたちがいました。車いす生活で食事や排せつ

の援助をしてもらう子ども、心臓の手術をしており鼻チューブで酸素を送られながら生活している子ども、体は元気に動き相手の言葉を理解するが、自分の言葉をうまく話せない子ども、など様々な障がいを抱えた子どもたちがいました。

その中で私は、自分の気持ちを言葉にできない女の子を担当しました。最初はどう接してよいのかわからず少し戸惑っていました。すると、職員から「言葉でのやりとりはできないけど、表情で伝わるし、たくさん自分から声掛けをすることで、子どものいろいろな反応が見えるよ。」とアドバイスをもらいました。それから私は、その女の子に積極的に声を掛けることにしました。すると、その子も私の言った言葉に反応して笑ったり真似をしたり、私の言葉に対して行動で返してくれました。その時に、言葉がうまく話せなくても表情や行動だけでコミュニケーションが取れることがわかりました。次の日、その子が通所してきたときに、すぐに私のもとに走って向かってきてくれて嬉しかったです。

施設にいるときは昼食の時間以外は 1 日中のほとんどを子どもたちと自由に遊んでいました。担当の子どもに付き添い、その子のしたい遊びを一緒にしました。施設では、保育園や幼稚園ように集団で生活しみんなで遊ぶのとは違い、子ども 1 人ひとりのしたいことを自由に伸び伸びと出来るように援助するということがわかりました。しかし、その中でも職員は必ず子どもの近くで全体が見渡せる位置にいて、常に安全に配慮する大切さを学びました。

1つ困った場面がありました。11 時 30 分に子どもたちの給食が来て、いつものように大きい食べ物を小さくしたり口に食べ物を運んだり食事の援助をしていました。すると、女の子が牛乳を全部飲み干し、食べ物はバナナを食べただけで、おもちゃの入っている押し入れの前でドアをノックし「遊びたいから開けて」と合図をしてきました。そのとき、全然ご飯を食べていなくて後からお腹がすいてしまうのではないかと思い「R ちゃんもうごちそうさま？まだご飯とか残っているよ？」と声掛けをしました。するとその子は泣きだしてしまい、私はどうしていいのかわからなくなってしまいました。後から職員に質問をすると、その施設では集団保育の保育園や幼稚園などとは違い、その子の食べたいものを食べ、ごちそうさまの合図を職員に知らせると遊んでいいということでした。そこでも集団保育との違いを知り、施設には様々な障がいを持つ子どもがいるため、子ども一人ひとりの気持ちを尊重し、その子どもに合わせた援助をするということが大切だと知りました。

私は子ども園に就職するのですが、就職して障がいを持った子どもとも関わる機会があると思うので、今回の施設実習で学んだことを生かしていきたいです。

子どもの支援から学んだこと
―職員の支援―

松川　愛

今回初めて施設での実習がありました。私が行った施設はダウン症の子どもや、発達に遅れのある子どもがいて、保護者と一緒に療育を受けるといった施設でした。年少クラスでは、まだ一人で通い、過ごすことの難しい子どもが、保護者と一緒に半日を過ごしていました。

子どもたちは朝来て、お昼まで保護者や同じクラスの子どもと過ごします。年長クラスは、保護者がいなくても生活の出来る子どもや、来年から小学校や施設の小学校に行く子どもがいるクラスでした。同じ年齢でも普通の子どもとは発達に大きな差がありました。普通はできる

ことでも、一人ではできなかったり、大人の力を借りてもなかなかできなかったりする子どもがいて、最初は驚きと「自分はこの子どもたちとうまく関わって実習していけるのか」という不安な気持ちでいっぱいでした。

初めの頃は、子どもたちとどのように接したらいいのか分かりませんでした。話し掛けてみても私の話す言葉の意味を理解できず、大きな声を出して走り出す子どもがいて、難しいことばかりでした。噛みつく子どもに注意するときも、「だめだよ」の言葉だけではなく、「A君噛みついたら痛くてけがをしてしまうから噛みつくのはやめようね」と、なぜ噛みついてはいけないのか、噛みつくことで相手がどうなるかがはっきりとわかるような言葉を考え、丁寧な言葉がけをしていくことの難しさを感じました。

「どうしたらいいのか」を具体的に分かりやすく子どもたちに伝えることは最初、本当に難しかったです。しかし、先生方が子どもたちに接していらっしゃる姿を観察していくことで少しずつ理解し、分かるようになってきました。信頼関係を少しでも築いていこうと思い、私は自分からコミュニケーションをとるようにして、先生方から学んだことを実践していきました。その結果、噛みついてきたり、爪でひっかいてきたり、何を言っても全く聞いてくれなかったりした子どもが、ある日突然、私に甘えてきたり、笑いかけてきたりしたときは言葉では表せないくらいとても嬉しかったです。しかし、子どもたちが私たち実習生に話し掛けてくれたり、一緒に遊んでくれたりするようになるまでには、何日もかかりました。子どもたちと信頼関係を築くことは難しいことだと思いました。

実習が始まって５日目に設定保育をさせていただきました。まだまだ子ども達は私に慣れていないときだったので最初は自信がなく、不安でしたが、先生方と何度も話し合い、子どもの姿を想像しながら準備していきました。設定保育は、製作をしました。製作中も子どもたちは、私が言ったことをすぐ忘れてしまうため、言葉の伝え方に苦戦しましたが、子どもの目を見て、分かりやすい言葉遣いを意識しながら落ち着いて話すように心がけました。一度だけではなく、何回か同じことを伝えていく必要があると取り組みながら感じました。　また、作品が完成したときに、私の所に来て「先生できました」と自分でいえる子どもと、一人では話すことの出来ない子どもがいて、なかなか言葉がうまく出ない子どもに対して、うなずきながらゆっくりとペースを合わせ、待つことが大切なことだと気がつきました。

製作は、一人一人が作品を作れるようにするだけではなく、最終的には大きな模造紙にみんなの作品を貼り付け、みんなで一つの大きな作品を作れるようにしました。子どもたちはとても喜んでくれて、毎日登園するたびに作品を眺めては、「すごいね」「これ○○が作ったやつだ」などと、嬉しそうに言っていました。子どもの喜ぶ姿はもちろん、保護者の方にもとても嬉しそうに作品を見ていただき、とても達成感を感じました。また、保護者から「先生ありがとう、A君、毎日嬉しそうに作品を作った話をします。」と言われたときは嬉しい気持ちと、保護者との関わりの大切さを感じました。

設定保育の日から、子ども達も少しずつ関わってくれるようになり、私自身も子ども達に積極的に関わっていけるようになりました。最終日、帰るときに、靴箱で靴を履いた後、私の名前はあまり分かっていなかったと思いますが、「先生」と言ってハイタッチをしてくれる子どもがいて、とても嬉しかったです。施設の子どもたちは、普通に保育園や幼稚園に通っている子どもとは大きく成長に差はありますが、子ども達は自分なりのやり方で、頑張っていろんな事に取り組んでいました。また、それは施

設の先生方の支援やサポートがしっかり行われているおかげだと言うことを実感しました。一つ一つの事がとても大変ではありましたが、小さな事もできるようになったことがあるといつも以上に大きな喜びがあり、充実した10日間となりました。

丁寧で分かりやすい言葉遣い、子どものそれぞれの自由な考えを認め、保護者との関わり、コミュニケーションを大切にしていくことを心がけながら、自分は子どもが好きだと言う気持ちを忘れずに、今回の経験を保育現場で生かしていけるようにしたいと思います。

私の保育観を変えた子どもたち

初等教育科　２年　佐藤　理沙

施設実習を終えて、私は子どもたちから沢山のことを学びました。

私は児童養護施設で幼児の部屋を担当しました。施設の中では、様々な環境の中で育った子どもたちが家族と一緒に暮らせない事情を抱え生活をしていました。

10日間の間で、保護者と子どもの面会や、一時保護の子どもや乳児院から入所していた子どもが家族のもとへ帰る姿、そしてその子どもを見送る他の子どもの姿など、本当に色々な姿を見ることがありました。その中で子どもたちは、親に対しても思いが違い、親と会えることを喜ぶ子どもだけでなく、情緒が不安定になる子どももいました。

ただ、子どもたちに共通していることは、保育所や幼稚園実習で関わってきたどの子どもよりも愛を求め、周りの大人の心を見抜き、時には辛辣な態度をとるほどに大人を観察していました。自分にとって敵か味方か、常に見極めているようでした。

実習が始まり、子どもたちにどのように接していいか戸惑いましたが、施設の職員の方の助言で“とにかく愛すること”そして“子どもと心で向き合うこと”が大切だと教えていただき、思いっきり子どもたちと関わろうと決意をしました。

施設の子どもたちと関わる中で、その場限りの言葉は通じず、「またあとでね」などの言葉は「嘘をついた」となると知りました。自分の言葉に対して責任を持つこと、約束を守れなかったときや間違ったことをしたときは必ず謝ることなど、人として当たり前なことが実はとても難しいことと知り、私自身の未熟さを痛感しました。毎日本当に反省の繰り返しで、どうしたら子どもにとって良い関わりなのか、何が正解なのか悩み、職員の方に相談したりなど模索しました。真摯に子どもと向き合おうとすることで、最初は距離を置いていた子どもも、少しずつ心を開き慕ってくれるようになったと感じたときは本当に心から嬉しく思いました。

時折、子どもが自分の気持ちがうまく出せずに癇癪をおこしたり、ほかの子どもに手を出したり、感情のコントロールができないときがありました。私自身どうしていいか分からずうまく関わることができませんでした。ある時、職員の方がその子どもに深呼吸ができるよう声掛けをすると、子どもが落ち着きその後自分の気持ちを話している場面を見ました。私も同じように接してみると子どもも落ち着きを取り戻した経験から、職員の方の一人ひとりのその状況に応じた関わり方の配慮があることを知りました。心に大きな傷を持った子どもたちが元気に生活できるのも、職員の方々の日々の関わりの積み重ねがあるからこそだと、子どもたちの姿を通して気付きました。

さまざまな環境で生まれ育ったどの子どもも、生きる権利があり、幸せにならなければならないと改めて思いました。そして、虐待をす

る親も実は幼少期に虐待を受けていたなど、様々な背景があることを知り、誰が悪いなど一概に責めることができないことも今回の実習で心から感じました。

実習を終えて、この貴重な経験を無駄にすることなく、“すべての子どもが、自分が自分であることに喜びを感じ、幸せな人生を歩めるために私ができることは何か”を、これから先も模索し続けていきたいです。

出会った子どもたちがこれから幸せな人生を歩めるように切に願います。